

Root

環境対策広報誌

2011.9
vol.22

特集 エコドライブのススメ

だれよりも安全に確実に
エコドライブの誇りを胸に

【兵庫の名産品・うすくち醤油】

関西の食文化を支えた
素材を生かす調味料

地球環境を守る、エコドライブを推進します。
まずはアイドリング・ストップから、始めてみませんか？

安全・安心・環境にやさしいトラック輸送



社団法人 兵庫県トラック協会

〒657-0043 神戸市灘区大石東町2丁目4-27
TEL 078 (882) 5556 (代表) FAX 078 (882) 5565



和光運輸株式会社

「追い越しをあきらめることが、 燃費向上にも安全運転にもつながる」

「うちのクルマは、高速道路で基本的に追い越しをしません」と、取締役営業部長の浅井健一さん。スピードリミッターの設定は時速80キロとし通常の時速81キロよりも厳しくしています。わずかに1キロですが、実はそこに大きな差が生まれます。時速79キロ以内で走らなければならぬため、下り坂での加速などを考慮し、メーターの目視で75キロぐらいを意識して走ります。その結果、よほどのことがない限り追い越さないので。

「追い越しができない」と思わずに、「追い越しをしない」と思うことで、ドライバーの意識が著しく変化します。余裕を持った運行計画に沿って時刻通りに出発し、予定通りに到着する。極めて当たり前のことを実行しています。

もう一つ、徹底してドライバーに伝えることがあります。「危ないと思ったら止まれ。確認できないときは動くな！」。

時速79キロ未満走行



特集 エコドライブのススメ

だれよりも安全に確実に プロドライバーの誇りを胸に

地球環境に貢献し、経費の削減につながるエコドライブ。前号で紹介した専門の施設で研修を受けるドライバーも年々増加しています。今号では、和光運輸株式会社と株式会社松原組運送を訪ね、研修を受けたドライバーの変化とともに、組織で取り組むことで大きな成果を生んでいる現状を紹介します。



▶ P3 和光運輸株式会社



▶ P6 株式会社 松原組運送



プロパン用ガスを運ぶタンクローリー。

トラックは走るのが仕事と考えがちですが、事故を予測したり、クルマの異常を感じたら、まず停止する。毎日毎日、必ずドライバーに伝えられます。

ドライバーの若返り

「交通安全に対する市民の監視も強まり、昔のような自分流に運転するドライバーは通用しない時代です。当社も、ここ10年ぐらいでドライバーが入れ替わりました。より安全に運転しなければいけない。そのような意識の高まりが研修を受けるきっかけになりました」と語る代表取締役の稲井博行さん。高圧ガスを積んだタンクローリーは、万が一にも事故に巻き込まれると、その被害は甚大に及ぶ可能性があります。だからこそ、安全運転が徹底され、さらには事故を引き起こさないための準備が二重にも三重にもかけられています。

各営業所には、ドライバー経験のある運行管理責任者が

あつた運行管理者は、「警察に届けるように」と伝え、事故届けを提出していました。数日して荷主から「事故があつて、相手から苦情が入っている」と連絡がありました。「はい、当社としては警察に届けているのですが……」と予想もしない展開が起きたときでも、実直に対応したおかげで信頼がより高まったそうです。

このように、荷主の信頼を損ねることもなく、より強い信頼関係が築けたのも、日々のドライバーへの教育、ドライバーとしての責任の重さを受け止めていたからです。



4月から義務化されたアルコール検査機。

在籍しています。どこをどのように走るのがベストなのか。その検証を積み重ねてきた実績が、一人ひとりのドライバーに伝承されていきます。「少しずつ、一日一日」と、浅井さんは言いますが、その地道な行動が和光運輸の信頼につながっています。

入社もないドライバーは、はじめにお米を運んだり、通常の貨物の運転を任せられます。入社してすぐに、運転できるわけではありません。運転姿勢、日常の行動、運転マナー、確かな運転技術、そして、経験を積み交通事情などを熟知し、すべてが整うと稲井社長から声がかかりタンクローリーの運転を任されるのです。

そして、稲井社長は「ドライバーだけで終わるなよ」と檄を飛ばします。高い志を持って、日々の安全運転に努めてほしいと願う気持ちの表れです。



参加者の声

エコドライブ、安全運転研修には毎年数名が参加しています。入社半年、30歳代後半のドライバーの研修参加感想文には、「エコドライブは普段から心がけていたが、実際に計測してみると、他のドライバーに比べてきていなかったのでショックだった」と。しかし、3日目のオリエンテーションでの意見交換や指導員の助言後



駐車場の壁に貼ったなどの小さな事故も必ず報告される。

専属としての使命

タクシートの燃料などのプロパンガスを運ぶタンクローリーは、比較的特殊な運送事業です。伊丹市に本社のある企業からの依頼で、ガスを積み目的地へ運ぶ。大手石油会社などのガスタンクからタクシートの営業所やプロパンガスの販売所へ。ほぼ決められた場所から場所への輸送です。しかし、各石油会社などで決められた独自のマニュアルに沿って行わなければならない。8トン、10トン車のわずかな過積載も許されません。もちろん、タバコもダメ。日常の体調管理にも気を使うからこそ、安全が約束されるのです。

タンクローリーには、荷主の企業名が表記されています。一般市民からの苦情は、必ず荷主に伝わります。かつて接触事故を起こしたときに、相手に何らかの理由があり、うやむやにしようとされたことがありました。ドライバーから連絡が

の計測では、かなり良い結果になって嬉しかったと書かれています。そして、研修で学んだエコドライブが、実際の路上ですべて活用できるものではないと感じながらも、信号停止手前での情力走行や停止直前までクラッチを切らないなど、学んだ技術を業務に活用していきたいと続いています。

和光運輸では、安全運転、エコドライブ、安全運転管理者講習などを実施。ドライバーとしての知識のみでなく、管理者としての指導力、判断力を養い、交通社会の変化に対応したドライバーを育成しています。



代表取締役の稲井博行さん(右)と取締役営業部長の浅井健一さん。



創業以来変わらないグリーン色のダンプ。
地域の人はみんな知っているという。

株式会社 松原組運送 神戸の市街地を走る大型ダンプ 市民に愛されるエコドライバーの先駆け

時代の変化に対応

昭和44年に創業した松原組運送は、神戸の発展とともに成長し実績を積み重ね、地域の人々に愛されてきました。土砂などを運ぶダンプ車を24台保有し、神戸ポートピア博覧会、西神ニュータウンの開発、そして地下鉄工事などを陰で支えてきました。

自身も日々奔走してきた代表取締役の松原昌浩さんは、「運送事業も昔と今では大きく変化しています。安全はもちろん、騒音や振動を出さないような運転が求められますし、職場の環境もどんどん変化しています」と語ります。かつては、100キログラムでも多く、少しでも早く運ぶことがドライバーに求められていましたが、現在では、そのようなドライバーは荷主から受け容れられません。

例えば、荷主の工場内の整備が行き届くと、構内作業を請け負う企業にも安全で清

掃・整備の行き届いたトラックやダンプが要求され、ドライバーの服装や礼儀も荷主企業の規約に沿わなければなりません。それに沿うことができない企業は契約を打ち切られます。企業と企業の関係と同じように、運送会社とドライバー（社員）の関係も複雑になっています。荷物を運んでいけばいい時代はもう終わり、会社や荷主の代表として走っている自覚を持たなければいけません。

そのためには、会社をあげていち早く対応する姿勢が重要です。トップの考えや経営方針、経営理念や売上実績などを社員と共有する必要があります。事業拡大のチャンス波にいかにも上手に乗るか。経営者だけでなく、社員だけでもない。いかに組織として時代の変化に対処するのか。そこに経営手腕が発揮されます。

考えて走るエコドライブ

「エコドライブも時代や世の中が求める変化です。クリーン

な排気、燃費の向上はもちろん、ダンプそのものもクリーンなイメージが必要です」。それをいかにして実践するかがカギ。安全運転・エコドライブ講習で、そのきっかけが社員全員に芽生えたといいます。

松原組運送ナンバーワンのエコドライバーである堀川昌浩さんは、燃費の良さがスバ抜けています。その秘訣は、安定走行。運行計画に余裕を持ち、アクセルを踏み過ぎない技術で、日々、阪神高速を走っています。「本来、最高速度が時速60キロと決められていますから速度をあげないように、常に考えて走るようにしています」。

般道路では、無理をしてアクセルを踏み込むのは禁物。毎日通う道路ならばなおさら、信号のタイミングを熟知し、負荷のかからない加速をする。これが燃費の効率を最大限に引き上げます。

予測するための知恵を身につけて考えて走る。エコドライブ講習で学んだことを実践できるかが、ドライバーの資質です。

組織の団結力を 育てるきっかけに

安定走行の恩恵は、車両の長期使用につながり、タイヤなどの消耗品も長持ちさせ、経

営面でのゆとりをもたらしにくれます。車両のストレスが少なく走行時の負荷が少ない。故障が少なくなれば、整備費用の削減につながります。プロのドライバーとして最大の道具となる車両を大切に扱うことが、そのままエコドライブになるのです。

一カ月ごとに集計される燃費指数。一人ひとりが少しでも高く、前よりもよい結果を求めることで、会社全体の数字が向上していきます。燃料費が高まっている今、15%の燃費向上は経営改善にも大いに役立ちます。

「可能な限りのドライバーに

研修を受けさせたい」と松原社長は、講習の成果が、一人のドライバーだけでなく会社という組織に与えるプラス効果を認めています。新人ドライバーの目標が明確になり、一人ひとりの向上心が高まる。先輩よりも、同僚よりも、いつかは必ずナンバー1になりたい。

さらに、会社の信頼につながり、経営面での安定も期待できる。そのよりよい循環が達成できれば、さらに大きな成果を生む。

「エコドライブへの取り組みは、ドライバーたちの団結力を育て、組織力を高めます」と入社5カ月目の松原和俊さん。ク

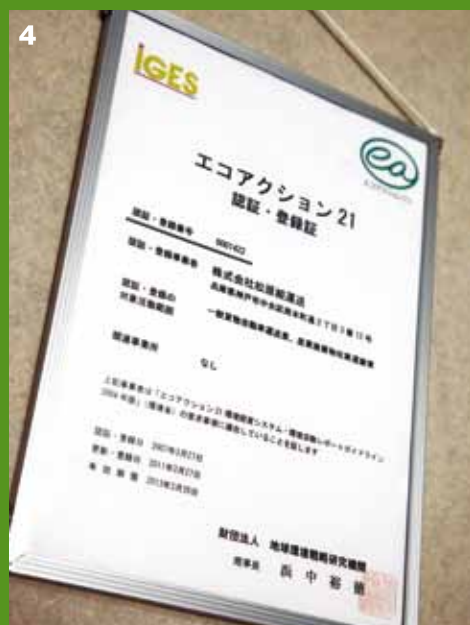
ルマにストレスが少なく環境に負荷のかかりにくい運転技術をみんなで共有し、互いに支えあうことがこれからの運送業界に求められています。



入社5ヶ月の松原和俊さん（右）と、代表取締役の松原昌浩さん（中）と、ナンバーワンエコドライバーの堀川昌浩さん（左）。



- 1 きちんと整理された工具。
- 2 毎月集計される燃費指数。ドライバーひとりひとりが確認できる。
- 3 トラックのボディーにに掲げられているエコアクション21のマーク。
- 4 社長室の壁に掲げられているエコアクション21の認定証。



関西の食文化を支えた 素材を生かす調味料

播磨の小京都とも呼ばれ、城下町の面影が残る兵庫県・たつの市。その一角にある「うすくち龍野醤油資料館」には江戸時代からの醤油醸造用具や資料などが展示され、醤油を造り継いできた先人たちの知恵や工夫を感じることができる。

麹と塩水を混合して桶に入れて発酵熟成させる仕込蔵。江戸時代は、温度調節ができなかったので、1年ほどかかったという。



1

2

3

製造工程は

酒造と酷似

水のの違いで

醤油の産地に

醤油の起源は古代にまでさかのぼる。宋から伝わった径山寺（きんざんじ）味噌のたまり液を偶然使ったところ、とても美味しい料理ができたことから広まったと言われている。16世紀頃にその製法が龍野や小豆島などに伝わり、さらに、京都の精進料理や懐石料理など関西の食文化に育まれるうちに、もろみに甘酒を加えた「うすくち醤油」が浸透していった。

となる麦や甘酒の材料となる米が豊富に収穫できました。しかも揖保川の水は鉄分の少ない軟水で、同じ兵庫でも酒造文化を育んだ六甲の水とは対照的。触媒反応により色が黒くなることがないため、揖保そうめんや龍野のうすくち醤油の製造には最適でした」と、うすくち龍野醤油資料館の澤勤館長は語る。

同資料館は、大手メーカーヒガシマル醤油（株）の旧工場を改装して1979年に開館。旧龍野市で初の国登録有形文化財に指定されており、失われつつある醤油醸造の歴史を伝えている。

「播州平野では、醤油の材料



4



5

- 1 炒った小麦をひき割ると、小麦のでんぷんを麹菌が消化しやすくなる。
- 2 醤油樽の製造に使われた道具の数々。酒樽には吉野杉が好んで用いられるが、塩分の多い醤油には秋田杉の樽が向いている。
- 3 揖保川の水をベースに、赤穂の塩、山間部で採れる大豆、播州平野の小麦、米を発酵させた麹と、龍野はうすくち醤油の材料に恵まれた土地だ。
- 4 木造建築ではあるがレンガ造りのルネッサンス様式。
- 5 展示スペースには、醤油瓶に貼られたラベルを集めたコーナーも。時代は変われど、ヒガシマルのブランド力は不変だ。



3代目館長の澤勤さん。1965年ヒガシマル醤油に入社後、28年間研究員として活躍。工場や営業も経験し、定年退職後に同資料館の館長に就任。

地球にやさしく、人にやさしく……

エコドライブ推進中!

(社)兵庫県トラック協会では、「地球にやさしく、人にやさしく」を目指して、自然と環境を考える人のエコドライブマナーの向上に努めます。エコドライブはさらに、省燃費であり経済的であるばかりでなく、排出黒煙の低減など環境保全にも大きく寄与し、エコドライブを行うことで交通事故の未然防止に役立つことも周知の事実です。ここでは、もう一度エコドライブの基本を紹介します。

- おだやかな発進と加速
- 市街地走行時のシフトアップ
- 定速走行の励行
- エンジnbrakeの多用
- 経済速度の厳守
- 停止・発進回数の抑制
- 空ぶかしの抑制
- 必要最小限度のアイドリング
- タイヤの空気圧
- 車両に負担をかけない



エコドライブ推進ステッカー

環境にやさしい物流に向けたパートナーシップ実現のための物流事業者向け普及啓発フォーラム (仮称)

日時 平成23年11月24日(木) 13:20~16:30

場所 神戸海洋博物館ホール

神戸市中央区波止場町2-2 TEL078(327)8983

(市営地下鉄海岸線「みなと元町駅」から南へ徒歩約10分)

(JR・阪神「元町駅」から南へ徒歩約15分)

(神戸高速(阪急・山陽)「高速花隈駅」から南へ徒歩約15分)

同時開催

低公害車両展示

参加費

無 料



醤油の製造工程が一目でわかる竹細工の模型を展示。ひとつひとつの道具や人の動きまで、リアルに再現されている。

油生産量の8割以上が濃口醤油であるにもかかわらず、龍野地域に限っては、約8割がうすくち醤油と逆転している。

「醤油は運送コストが高いため、龍野醤油の流通・消費先は関西エリアがほとんど。名古屋から東は濃口、九州から南は甘みの強いさしみ醤油が好んで使われるようです」(澤氏)。

また、第二次世界大戦下では、米を甘酒にして使用するうすくち醤油は贅沢品と見なされ、軍部により製造を統制された。うすくち醤油を愛する関西商人らの働きかけにより、製造中止の危機は免れたが、龍野醤油の醸造が本格化するのには、終戦後、自由経済に戻ってからのことだった。

庶民にも料理人にも愛される味

素材の持ち味を損ないうすくち醤油の魅力は、料理人たちの間にも知れ渡っていたようだ。かの北大路魯山人は、「料理天国」の中に、「気の利いた料理するには、必ず薄口しょうゆを用いなければならない」と記している。

近代工業化が進み、うすくち醤油の品質が安定した反面、造り手の個性が失われた寂しさもある。「JR本竜野駅に降り立つと、醤油の香りがしたものです」と、懐かしそうに語る澤氏。醤油の国内消費量は5年ほど前をピークに減少傾向にあり、とくに家庭内での消費が鈍くなっているという。

「それでも、ドレッシングやポン酢などの調味料、惣菜や弁当などの加工食品を介して、皆さんのお口に届いているはず。龍野の自然と歴史が育んだ味を、忘れないでいただきたいですね」。

レンガ造りで2重壁になっている麹室。回転式天井や窓で温度が調節できるよう工夫されている。

